

日本語訳は明治学院大学横山宏章先生を煩わした。深く謝意を表したい。

(2) 老人ホーム I

——南磨房郷敬老院——

武川 正吾

(社会保障研究所研究員)

中国では、老親の扶養・介護は子供が行うのが原則である。最近、中国でも、両親の面倒をみない子供や、老親を虐待する子供の例が報道されるようになってきているが、そうした場合批判されるのは常に子供の方であり、扶養義務を放棄した子供に対しては世論による厳しい社会的制裁が加えられる。したがって、一部に有料の老人ホームがあるとはいえ、一般的に言えば、中国の老人ホームは「社会的孤老」と呼ばれる身寄りのない老人たちのための施設であり、多分に「最後の避難所」としての性格を備えている。そして、そうした老人ホームとして、都市の労働者出身の社会的孤老のためには、各級の労働組合が運営する「養老院」があり、農村の農民出身の社会的孤老のためには、人民公社の設置する「敬老院」がある。



南磨房郷の敬老院

今回私たちが訪ねた老人ホームは有料老人ホームも含めて4ヵ所であるが、そのうちここでは北京市郊外にある「南磨房郷敬老院」(写真参照)を紹介してみたい。

まず南磨房郷について簡単に説明しておこう。南磨房郡は人口約1万人の生産単位で、北京市朝陽区に位置している。中国の人民公社は、本来、政治・行政と経済とが一体となった地域組織であったが、両者が一体化したために生じる非効率を避けるために、最近、人民公社は政治・行政部門と経済部門とに分化するようになった。南磨房の人民公社も政治・行政を担当する郷人民政府と経済を担当する部門に分かれたばかりである。この南磨房郷は4つの生産大隊から成り、その下に34の生産隊がある。大都市に近接しているため、この郷では野菜が主要な生産物である。

私たちは、北京市の民生局の役人の案内で、敬老院に到着した。南磨房郷敬老院という表札のついた門構えを通過して敷地内に入ると、敬老院の建物がすぐ目についた。北京は気候が乾燥していて木材が少ないためか煉瓦づくりの住居が多いが、ここの建物も煉瓦づくりである。煉瓦やブロックの塀で囲まれた敷地のなかに、2棟ずつ対になった建物が3列に並んでおり、建物と建物の間は庭のようになっている。天安門の近くをはじめとして、北京市内にはいたるところに煉瓦づくりの住居が見られるが、それらに比べると、すくなくとも外見上はこの敬老院の方が立派で小奇麗な感じがする。まだ建築後何年もたっていないせいだろうか。私たちは、敬老院の集会室に案内され、郷長および院長から話を聞くことができた。

南磨房郷敬老院は1958年に創設され、26年の歴史を持っている。現在の建物が建設されたのは79年であり、それまでは別の場所にあった。新しい建物になって、部屋数は倍近くになったという。

敬老院で暮らす老人の数は58年に創設されて以来の26年間に延べ人数で140人くらいいた。現在は30人の老人が暮らしている。男女比は、女性が7人、男性が23人と、圧倒的に男性が多い。南磨房を中国全体に一般化することはできないが、在所者の男女比が23対40と女性の方が多いわが国の養護老人ホームとはちょうど逆になっている。入所者の年齢にはかなり幅があって最高年齢が83歳、最低年齢が32歳となっている。この32歳の方は障害者であり、この敬老院は身体障害者のための施設も兼ねている。とはいっても、入所者の大部分は高齢者である。彼らはみな身寄りのない老人で、子供がいなかったり、夫と死別したりした人びとである。

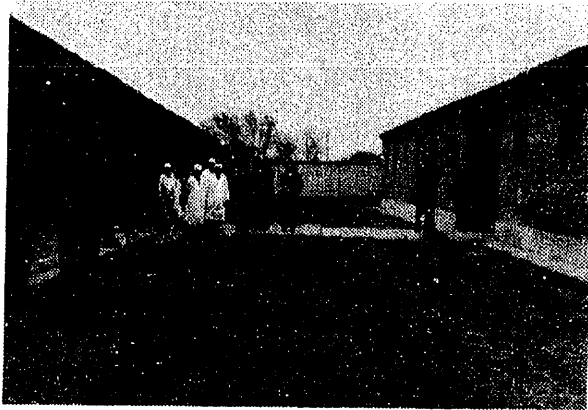
高齢者に顕著に現れる健康問題は、この敬老院でもみられる。身体的障害を持った老人は2人いる。このうち1人は60歳位のいわゆる「寝たきり老人」であり、他の1人は歩行機を使えば歩けるという程度の「障害老人」である。いわゆる「ボケ老人」も1人いるということである。こうした種類の老人の出現率については、中国では統計が整備されていないので、まだ分かっていない。

南磨房敬老院には全部で53の部屋がある。そのうち老人が生活するための部屋は20室で、その他はサービス室・事務室等である。各部屋に2人ずつ暮らすことになっている。したがって定員は40人と考えてよいだろう。現員

は30名であるから、10名分の余裕があることになる。そのため、南磨房郷以外の老人に対してもこの敬老院を公開することを検討中とのことであり、現に私たちが訪ねた翌日にも北京市から2人の老人が新たに来ることになっていた。その場合、費用負担は北京市の人民政府がおこない、郷からはまったく支出しないらしい。

敬老院で働く職員は、院長1人、副院長1人、コック2人、サービス係が4人と全部で8人いる。サービス係は男女半々である。サービス係の仕事の内容は、障害の重症な老人に食事を運んだり、入浴の手伝いをしたりという介護や、老人のために服を縫ったりというように日常の身の廻りの世話をしたりすることが中心である。わが国の老人ホームの寮母や指導員に相当するものと思われる。彼らの月給は院長が70元、副院長が70元、サービス係が60元であり、彼らはすべてが郷の職員である。1元は大体100円位であるが、中国では労働者の月給が50～60元ということであるから、南磨房郷敬老院の職員の給料は平均的なものであろう。

老人たちの日常生活はどのようなところで営まれるのであろうか。まず彼らの住んでいる部屋については、すでに述べたように、2人に1部屋が割り当てられている。各部屋は土足で入れるようになっていて、木製のベッドや椅子と小さな箆筒が2つずつ置いてある。布団や衣服は敬老院から現物支給されるものを用いているとのことである。私たちが見学した部屋には、ベッドや箆筒のほかにラジオや魔法瓶などの日常的な小物が置いてあった。ラジオは敬老院から支給されたもの



南磨房敬老院とその職員たち

らしいが、魔法瓶は各人が私有しているものである。老人たちは、こうした小物は自分だけの財産として用いたがり、他人の物は使いたがらないと言う。部屋の広さの割には老人たちの荷物が少ないので、概して各部屋は殺風景である。また、窓が小さいために昼間でも電灯を点けないと室内は薄暗い。部屋に近付くと、においで香をたいてるのがわかる。なんでも衛生上の理由ということだ。

食事は、重度の身体的障害のある人を別にして、1日2回、午前10時と午後4時に食堂に集まって食べる。回数が少ないのは別に食事に手を抜いているからではなく、朝起きてすぐに農作業を開始し昼近くまで食事を取らない、という華北地方の農民の伝統的な生活習慣に基づいているのである。もっとも北京の都市の人民がそうした生活習慣を現在維持しているわけではない。また、南磨房郷の他の人民がそうした食生活を送っているのかいにかについては定かでない。私たちが訪ねたときはちょうどメーデーの翌日で、特別の献立が用意されていた。午前は9品、午後はスープと主食以外に4品という中華料理の献立表が食堂に貼ってあった。しかし、こうした食事は何か祝い事のある晴れの日のもので

あり、通常は、米飯・麵・饅頭といった主食の他に数品の副食が付くというものらしい。

衣類は現物支給されており、また、季節ごとにスタッフが、敬老院に設置されているミシンで新しい服を縫っている。月2回の散髪があり、風呂は週1回共同浴場に入ることになっている。これらはいずれも無料である。

老人たちが病気になったときは、どのような処置がとられるのだろうか。軽症の場合は敬老院のなかで薬を与えられる。南磨房郷敬老院の副院長は「赤脚医生」、すなわちかつてわが国でも有名になった「ハダシのお医者さん」であるから、プライマリー・ケアとしては敬老院内部で十分な処置がとれるのだろう。しかし、すこし重い病気の場合には、郷の病院から医師に往診してもらったり、また付近の病院へ患者を車で運ぶことになっている。また、郷の病院がすぐ隣りにあり、この敬老院の老人を重点保護の対象にしている。なお、医療費はすべて郷の負担である。

敬老院の費用は原則として老人からは徴収せずに、郷が全額支出している。郷は農村工場の利潤などをこれに充てている。郷は1人の老人に対して、生活費としては月20元を支出している。敬老院のなかで老人たちが飼っているニワトリ、ヒツジ、ブタから得る収入のうち月3元を生活費に充てているので、実際には月23元が老人1人当たりの生活費となる。その他に月5元の小遣いが各老人に支給される。これの使い途は各人の自由である。しかしスタッフの給料なども含めると、この敬老院の予算は、1年間で1人当たり平均約1000元になる。

この敬老院は原則として南磨房郷の老人の

ためのものであるから、国家からの補助は受けていない。したがって他の場所の老人が入所するときには、必ずしも無料というわけにはいかない。たとえば、都市の工場を退職した「退休老人」と呼ばれる年金生活の老人がかつて入所していたことがあったが、この老人は退職した工場から貰う月40元の年金のうち20元を食事代として敬老院に納めていた。また、私たちが訪ねた明るる日に入所予定の北京市街の2人の老人のばあいは、北京市の民生局が月105元を敬老院に補助することになっていた。

中国では農業生産の増大とともに農民の生活水準が大幅に向上しつつあり、とりわけ大都市近郊の農民にこのことが当てはまると言う。したがって私たちが訪ねた北京と上海の農村は、中国の農村のなかでは比較的裕福な部類に属するだろう。南磨房郷も、私たちが上海で訪ねた長征郷ほどではないにしても、中国のなかではかなり裕福なほうであろう。中国の農村部では、退職者に年金が支給できるほど豊かな郷（人民公社）や生産大隊は限られているが、南磨房では、男60歳女55歳になると生産大隊から月30元の年金——敬老院の服務員の給料の半額——が支給されている（はっきりと確認できなかったのだが、敬老院に入所するとこの年金は打ち切られることになるらしい）。これは農民に支給される年金としては、額の高い方である。また、敬老院を運営できるほどの経済力をもった農村も非常に少なく、大部分の農村は南磨房には程遠い状況にあるにちがいない。したがって南磨房の敬老院は中国の老人ホームの代表例としては相応しくないかもしれない。しかし、

工業化および都市化の進展しつつある中国の農村が、これから先に向かう地点を示しているようには思われるのである。

(3) 老人ホームII

——上海第一福利院——

三上美美子

(社会保障研究所研究員)

社会福利学者友好訪中団の一行は、春爛漫の中国を北京～杭州～上海と旅した。北京では歴史の深さと雄大さに感嘆し、杭州では森と湖のしっとりした美しさに安らぎを覚えたが、上海は、また趣を異にし、活気ある港町の風情が感じられる都市であった。この上海で、我々は上海社会科学院のご厚意により、有料の老人ホーム、人民公社、退職者アパート等を訪問することができた。本節では、有料老人ホーム「上海第一福利院」での見聞をまとめておくことにする。

上海の老人ホームは、市のレベルで4つ、区のレベルで6つあり、いずれも“社会の孤老”（身寄りのない老人）を引受け、彼らの生活の面倒をみている。その中で上海第一福利院は、1978年に発足した市レベルの老人ホームで、唯一の有料（軽費）施設である。敷地6,600㎡に主要なビルは2つ（建物面積10,000㎡）、部屋面積は3,500㎡で、計500名の収容が可能である。1つのビルは目下建築中で、各室バス・水洗トイレ付きのモダンなホームとなる。この新ビルの明るいミルクコーヒー色の外壁は、旧ビル（我々が見学したところ）のやや寒々とした感じのするグレーのコンクリート壁とは、対照的であった。ビルが高層化しているのは、上海市内の最近の住